

## < 北京電影学院特別講義 >

### 「坂和的中国電影論」

H 1 9 年 1 0 月 1 0 日 (水) (午後 2 時 ~ 4 時 1 5 分)

王鴻海 (ワン・ホンハイ) 先生 : 中国語で坂和章平を紹介。

学生 : (拍手)

#### < はじめに 自己紹介 >

坂和 : 皆さん、はじめまして。你好 (ニイハオ)

学生 : 你好。(拍手)

坂和 : まず、今日こういう特別講義をセットしていただいた美術学部の王鴻海先生と劉旭光 (リュウ・シュイグアン) 先生そして客員教授である古澤敏文先生に感謝したいと思います。今日は A 4 で 3 頁のレジюмеと私が観た約 1 2 0 本の中国映画の資料を配っています。レジюмеをすべてお話することはできませんので、断片的に選んでお話しします。私の講義のテーマは、「日本人から見た中国映画論」です。なお、今日通訳してもらった女性は西安出身の余静 (ヨ・セイ) さんです。彼女は 6 年前に日本に留学して法律の勉強をしています。中国の弁護士 (律師) を目指して現在司法試験の勉強をしており、今年 9 月も受験しました。後でお話ししますが、中国では物権法が制定されました。現在、北京を中心として街の再開発が進んでいますが、その中で物権法は非常に大きな役割を果たします。また私は一昨日胡同 (フートン) 巡りをしてきました。そういう中国の都市問題、住宅問題を絡めた映画のお話もしたいと思います。

まず自己紹介です。私は 1 9 4 9 年の 1 月、つまり中華人民共和国が成立した 1 9 4 9 年 1 0 月 1 日と同じ年に生まれました。司法試験に合格し 1 9 7 4 年に弁護士登録した後、公害問題に約 1 0 年間、都市問題に 2 4 年間取り組み、計 3 4 年間弁護士活動をしています。このように、都市問題をライフワークとして取り組んでいる弁護士として、中国映画をどうみるかが、私の 1 つの視点です。私は小学校から中学、高校そして大学に入ってから映画が大好きで、たくさん観てきました。弁護士になってからは仕事が忙しくて映画館には行けませんでした。テレビやビデオでたくさん観ました。レジюмеにホームページのアドレスを書いていますから、是非それを見てください。私は現在 1 年間で約 3 0 0 本の映画を観ています。一方で弁護士の仕事をやりながら、他方で年間 3 0 0 本の映画を観て、観た映画全部について評論を書き、今皆さんに見ていただいている『SHOW - HEY シネマルーム』というシリーズで出版しています。以上を前置きとして、これから本論に入ります。

#### < 私の映画論 その 1 なぜ映画が面白い? >

まず、レジюме 1 頁の第 2 の 5 「坂和的中国映画論」を見てください。ここでは、「なぜ映画が面白いのか」を書いています。私の考えでは、映画は第 1 に人間の本性に迫ってくる。第 2 に人生の縮図である。第 3 に自分が体験したことのないことをスクリーン上で体験できる。そして第 4 に私の大好きな歴史の勉強ができ、第 5 にかわいい女性との恋愛体験が映画の中でできる (笑)。そういう意味では、弁護士としての真面目な視点とは別に、5 8 歳のスケベなおじさんとしての映画の楽しみ方もありますが (笑) 私はそれは当然だと思っています。

#### < 私の映画論 その 2 なぜ映画評論を書くの? >

次に、自分が観た映画の評論をなぜ書くのか? それは、第 1 に書かなければ映画を観た時の感動を忘れてしまう。別の言い方をすると、書くことによって感動を記録できる。第 2 に他人との議論の材料になる。第 3 に読者に対して夢や希望、楽しみを与えることができるためです。『SHOW - HEY シネマルーム』は、これまでパート 1 から 1 4 まで計 1 4 冊を出版しました。1 冊に約 6 0 本から 7 0 本の映画評論が入っています。したがって、既に約 1 0 0 0 本の映画評論を書いたことになります。それくらいのデータがあれば、おじさん、おばさん、若い人たちそれぞれの年代や好みに対応して、自分が観た映画についてディスカッションする材料として十分です。

#### < 私の映画論 その 3 私の映画評論のユニーク性 >

次に、私の書く映画評論のユニーク性についてお話します。マスコミを使って映画の宣伝をする、そういう役割のための映画評論家がたくさんいます。その人たちは、映画の宣伝のために評論を書くわけだから、決して悪口は書きません。よほど有名になったトップの評論家の 1 0 人、そういうレベルになると自分の思ったことを正直に書けますが、並の評論家ではなかなか本音を書けません。ところがその点、私は弁護士として本業をやりながら他方で映画評論を書いている立場ですから、自由に自分の意見を書くことができます。つまり、映画評論を書くについては縛られないことが大切だと思っています。そのことを大前提として、私の映画評論のユニーク性の第 1 は、弁護士としての視点が強く入っていることです。多分中国の皆さんは、アメリカの陪審制度についてあまり知らないと思います。ちなみに、北京電影学院の皆さんの中でアメリカの陪審制度について知っている方は手を挙げてください。やはり知っている人は少ないですね。アメリカでは裁判モノの名作がたくさんあります。日本でも 2 0 0 9 年から裁判員制度が実施されます。その影響もあって、裁判を扱った映画が少しずつ増えていますが、そういうテーマの映画については弁護士である私の切り口、私の評論が非常に大きな意味をもちます。それが第 1 の特徴です。

第2の特徴は、都市問題、住宅問題という視点からの映画評論です。これは後で詳しくお話します。それ以外は、歴史が大好き、文学が大好き、恋愛が大好き、その他自分の好みによって自由に書いています。

#### <中国映画の100年>

次に第3「中国電影の100年」、レジュメ2頁です。今日は少し資料をもってきました。日本に中国映画が入ってきたのはいつ頃だと思いますか？どなたか？『黄色い大地』が世界的な賞を取ったのは何年でしょうか？1985年ですね。また文化大革命のために閉鎖されていた北京電影学院が再開されたのが78年ですね。その数年後に『黄色い大地』や『紅いコーリャン』などの作品によって、中国映画が世界的に認められたわけです。しかし当然その時代、日本でそういう中国映画を観ている人はごくわずかの関係者だけでした。日本で中国映画が少し紹介されるようになったのは、1980年代後半から90年代にかけてです。今年が2007年だから、中国映画が日本に入ってきたのはわずかここ20年のことです。数年ごとに中日の交流映画祭が開かれ、中国映画が10本、20本と紹介され、少しずつ広がっていきました。私が特に中国映画をたくさん観たのは2004年です。そしてそれをまとめたのが、『SHOW-HEYシネマルーム』のパート5である『坂和的中国電影大観』です。ちなみに、中日の国交回復がされたのは1972年9月29日です。私が今皆さんに示しているのは、9月29日の中日の国交回復35周年を記念した日本の新聞です。周恩来を知らない人はいないでしょうが、その隣で握手している総理大臣田中角栄をご存知の人は手を挙げてください。あっ、知ってる。さすがですね。日本の今の20歳代の若者は、田中角栄を知らない人がたくさんいます。ちなみに、私の専門である都市法の関係でも、田中角栄が近代都市法の確立に大きく寄与しました。このように、1972年から今日まで35年間の中日の交流の歴史をまず頭の中に入れて中国映画の勉強をする必要があります。2004年12月に発売された『坂和的中国電影大観』では、計66本の中国映画をさまざまな視点からまとめました。皆さんには是非それを読んで、意見を聞かせてもらいたいと思います。

#### <中国の近代史をどうみるか？>

レジュメに書いてある中国映画が生まれてから100年の歴史、それについては皆さんはきっと詳しく勉強されていると思います。北京東郊の田園地帯に中国映画100年を記念する「中国映画博物館」も昨年7月にオープンしたと聞いています。私たち日本人がみる中国の近代史、それは日清戦争・日露戦争の時代から今日までの100年です。そのうち、大陸から日本を追い出すことができた1945年まで、中国の人たちは西欧列強や日本から大きな苦しみを受けてきました。今日はそのことについては一切触れません。ただ、中国100年の歴史と同じように、日本にも100年の歴史があり、香港、台湾にも100年の歴史があります。最近では映画の技術の進歩とともに人間的な交流も広がっています。したがって、中国映画の100年という枠ではなく、中国映画と香港映画、中国映画と韓国映画、中国映画と台湾映画そして中国映画と日本映画、そういう交流が進んでいます。1945年8月の日本の敗戦後、最近までは経済的、文化的に日本が先を走っていましたから、映画の世界でも日本がリードしてきました。しかし、これからは中国の方が人間的にも物量的にも大きいわけですから、今後は中国がリードしていく立場になると私は思っています。決して政治的な問題や経済的な勝ち負けの問題ではなく、文化の交流という視点で中国がリードしてもらいたいと思います。

#### <『黄色い大地』以降の中国映画の意義>

次に、中国映画の各論、中身を話します。レジュメの2頁です。第4「『黄色い大地』(84年)以降の中国映画の意義」。これについては私も少しは勉強してありますが、よく知らないところもあります。それに対して当然皆さんはたくさん勉強して頭の中に入っているはずですが、ここで私は皆さんが学んでいるこの北京電影学院の意義について考えてもらいたいと思います。皆さんは当たり前のようにこの大学に入ったかもしれません。もちろん厳しい競争を戦い抜いてこの大学に入ったことだと思います。今、学生の数は約2000名ですか。

学生：だいたい。

坂和：国立の映画大学ですね。

学生：そうです。

坂和：日本にはそういう国立の映画大学はありません。ましてや、監督、俳優、撮影、美術など総合的な映画づくりを学ぶ総合大学はありません。それはなぜかということ、いろんな理由があります。日本は戦争が終わった後、アメリカの援助を受けて経済成長しました。1945年8月に戦争が終わり、それから約10年後の1955年頃から日本は復興していきました。そして貧しかった日本は、1964年の東京オリンピックを契機として急激に経済成長しました。いいですか、1964年です。中日国交回復はその8年後の1972年です。1964年といえば、今から43年前。現在日本は経済的には非常に豊かです。しかし1960年代の日本は経済的にはまだ貧しかった。ところが今、1960年代を懐かしむ映画が日本で大ヒットしています。それはなぜかということ、経済的には貧しかったけれども、心は豊かだった、家族の絆があったからです。そういう時代状況の中で、映画はたった一つの国民的娯楽として広がりました。こういう社会構造は昔の中国も同じだと思います。したがって、陳凱歌(チェン・カイコー)監督、張藝

謀(チャン・イーモウ)監督たちの、昔の古き良き中国を懐かしむ映画が中国映画の1つのパターンです。ちなみに、張藝謀監督の作品には「しあわせ3部作」があります。すなわち『初恋のきた道』と『あの子を探して』それから『至福のとき』。この3本が「しあわせ3部作」という名前で日本では広く知られています。皆さん、そういうお話はご存知でしょうか?その他にも「しあわせ3部作」と同じようないかにも心温まる中国映画があり、日本人はこれが大好きです。それと同じような感覚で、今の豊かな時代に1960年代の日本を懐かしむ映画が日本でヒットしているわけです。

#### <北京電影学院の役割>

話が少し飛びましたので元に戻します。北京電影学院の役割です。その役割の大きさを皆さんに自覚してもらうためには、皆さんに日本の状況について勉強してもらいたいと思います。日本では戦後、いくつかの映画製作会社が生まれました。すなわち東宝、東映、松竹、大映、日活、新東宝などです。そういう大手製作会社が国民のいろいろなニーズを考えて次々と映画をつくりました。その中で自然に監督が育ち、撮影の技術が育ち、俳優が育ちました。しかし、それはあくまで製作会社ごとのシステムであって、国を挙げての映画人の養成ではありません。皆さんは日本の黒澤明監督をご存知だと思います。そういう有名な監督の下で勉強した人たちが少しずつ育っていったのです。しかし逆に言えば、それしかありませんでした。他方、映画産業は戦後ずっと成長していましたが、ある時点で急にダウンしました。それはなぜかという、テレビの影響です。家庭でくつろぐ中でニュースやバラエティそしてテレビドラマを見ることができるようになると、映画人口は急激に減少していきました。最近少し持ち直しましたが、それでも私たちが心配しているのは邦画バブルと呼ばれる傾向です。これはつまり、中身がなく、俳優の人気やテレビによる話題性だけで広がっているという危険信号です。皆さんは木村拓哉を知っていますか?たくさんの方が知っていますね。木村拓哉の出演映画は大ヒットします。現在、張藝謀監督の『HERO』と同じタイトルの『HERO』という映画が上映されて大ヒットしています。これに彼が検察官の役で登場します。スーツを着てネクタイを締めた検事ではなく、ラフな服装をした型破りな検事の役割です。これはもともとテレビドラマとして大ヒットしたものを映画化したものです。ここで私が何を言いたいかというと、テレビでヒットしたドラマを映画化し、それをテレビで大宣伝をする。これが映画をヒットさせる1つのやり方です。しかし私に言わせれば、テレビドラマの作り方と映画の作り方は絶対違うはずですが、安易なテレビドラマをそのままスクリーンにもって来て大量宣伝さえすれば大ヒットするというのは良くない現象だと私は思っています。しかし現実には、テレビドラマをたくさんつくっている監督が映画デビューというケースが最近増えています。もちろんそれがすべてダメだとは言いませんが、問題のある傾向だと思っています。それに対して皆さんは大学の中で4年間も基礎を勉強して、それから映画づくりに入るわけです。是非、監督、俳優、撮影、美術などの役割を認識のうえ、1本1本の映画を心を込めてつくってほしいと思います。そんな心を込めた映画づくりが観客にアピールする1番大きな原動力です。私は北京電影学院の皆さんには、これから中国を中心としたアジアの合作映画をつくっていく中核となる部隊だという自覚をもってもらいたいわけです。中国は人口が13億人。日本は1億3千万。韓国は5千万。台湾は2千万です。したがって、製作する映画の数も全然違います。そこでもう1度同じことを言いますが、皆さんにはアジア合作映画のリーダーシップを発揮するんだという気持ちで頑張ってもらいたいと思います。以上が、皆さん方に対する期待と希望です。

#### <第5世代監督と坂和的問題提起>

次にレジメ第5「第5世代監督の果たした役割(特に張藝謀と陳凱歌)」についてお話します。ここからはレジメ3頁の第9「中国映画にみる論点(坂和的な問題提起)」とセットで話します。お話するのはごく一部です。たとえば、第1の「文化大革命をどう考える?」、第2の「下放政策をどう考える?」、第3はとばして、第4の「都市問題 再開発をどう考える?」、それから第6の「ドキュメンタリー映画をどう考える?」などの問題提起です。それからレジメ3頁の第10「この映画、あの映画をどう見るか?(坂和的検討の視点)」とも関連づけて話します。ここでは、作品ごとに映画をどう考えるかということをお話します。もっともこの第9と第10を話せば、2時間ではとても足りず、皆さんに一晩つき合ってもらわなければなりません。つき合ってくれるなら、是非やりますが(笑)。それは無茶でしょうから、今日はその中のごく一部だけお話します。

#### <陳凱歌と張藝謀の3つの時期区分>

そこで陳凱歌と張藝謀ですが、皆さんご存知のとおり、彼らの作品は大きくA、B、Cと3つの時期に分かれると思います。レジメ第10に彼らの作品をまとめているので、それを見ながらお聞きください。彼らの最初の作品は『黄色い大地』と『紅いコーリャン』。中国映画を代表するこの両作品は本当にこれぞ中国映画という力強さを表した映画です。これをAとすると、Bの作品が、張藝謀のしあわせ3部作や陳凱歌の『北京ヴァイオリン』です。そしてCの時代、つまり一番新しい時代は張藝謀の『HERO』と『LOVERS』、陳凱歌の『PROMISE』です。この3つの時期によってはっきり傾向と特徴が分かれる作品を観て、私はいつも「あなたはどれが好きですか?」という質問をぶつけます。当然、年配の人たちは「昔の映画は良かった」、そして「最近の映画はつまらない」と答えます。私も『PROMISE』

は全然面白くありませんでした。『HERO』は、歴史が大好きだからそれなりに面白かったし、色彩がムチャクチャきれいでした。しかし、ああいうワイヤーを使ったアクション映画は、私はあまり好きではありません。張藝謀監督も陳凱歌監督もあの時期になぜそういう作品をつくったのかというと、それは中国の市場ではなく、ハリウッドの市場に進出するためです。その方がいいか悪いかは別として、どちらが好きかという観点だけで皆さんはA、B、Cのどれが好きですか？Cが好きな人。Bが好きな人。Aが好きな人。分類は不正確かもしれませんが……。まずAが好きな人？まずまずですね。次にBが好きな人は？結構多いですね。そして最後にCが好きな人は？少ないですね。『HERO』や『PROMISE』が好きな人は少ないですね。私の主観ですが、それはいい傾向だと思います。こういう話を映画が好きな日本人にすると、10人のうち1人は理解できますが、9人は理解できません。つまり、それだけ中国映画が日本に浸透している度合いが少ないということです。ましてや、『黄色い大地』や『紅いコーリャン』を観たことがある日本人は、私よりも上の世代の人たちに限られます。したがって私の役割は、中国映画が大好きな映画評論家として、張藝謀監督、陳凱歌監督のA、Bの作品のすばらしさを伝えていくことだと思っています。

#### <田壮壮(ティエン・チュアンチュアン)監督と霍建起(フォ・ジェンチイ)監督>

第5世代監督はこの2人が圧倒的に有名ですが、私はそれ以外にも田壮壮監督と霍建起監督に注目しています。この2人も同期生だと聞いています。霍建起監督は美術学部だから皆さんの先輩ですね。

ここ約10年で中国映画が日本でヒットしてきた最大の要因となった映画は何だと思えますか？この4人の監督のどの作品だと思えますか？

学生：『初恋のきた道』

坂和：ハイ、正解です。もっとも、『初恋のきた道』は2000年の作品ですから、本当は最近約10年で中国映画を急に有名にしたのは、1999年の霍建起監督の『山の郵便配達』です。当然皆さんも観ていると思いますが、本当にあの映画を観た時はビックリしました。これは言ってみれば、郵便物を持って山の中を配達して回るだけの映画です。ところがその中で、父親と息子の絆が実に心温まるストーリーとして描かれています。日本人はそういう物語が大好きですから、口コミ、すなわち口から口への評判で広がりました。そういう意味では、第5世代監督の張藝謀監督、陳凱歌監督の2人は別格として、霍建起監督の果たした役割も非常に大きいものがあります。もう1人は田壮壮監督です。実は今日お昼前に喫茶室で勉強していたところ、バッタリ田壮壮監督と顔を合わせました。そこで古澤先生と一緒にごあいさつをし、握手をし記念撮影をさせていただきました。こんな光栄なことはありません。

それは余談として、皆さんは田壮壮監督の『吳清源 極みの棋譜』をもう観ましたか。これを観た人は？少ないですね。中国ではもう公開されているはずですが、日本の公開は11月17日からです。私は9月25日に試写室で観ました。そしてビックリしました。ビックリしたという意味は、ほとんど日本人が知らない世界が描かれていることです。私は中学生の時から囲碁と将棋をやっていたので、吳清源のことはよく知っているつもりでした。しかし、私のそんな知識はごく限定的なものだったということをこの映画を観て思い知らされました。その第1は、彼が日本人に帰化するについてのいろんな物語。第2は敗戦直前の1945年8月6日、広島に原爆が投下されましたが、原爆が投下されたその日に本因坊戦という囲碁のタイトル戦をやっていたことです。そういう物語がこの映画の中で描かれています。さらに第3に吳清源が日本の新興宗教である璽宇(じう)教にはまっていって姿が描かれます。その他、私たち日本人が全然知らないストーリーがここにはたくさん描かれています。こんな物語を日本の若い人たちはほとんど知らないと思うので、この映画が日本でヒットするかどうか少し心配しています。

#### <第5世代監督と文化大革命>

第5世代監督の陳凱歌監督、張藝謀監督の生き方、それから霍建起監督の生き方、田壮壮監督の生き方、それにはそれぞれの特徴があり、自分の価値観を貫いている生き方だと思います。この第5世代監督の作品を考えるについての私の論点の1つは、文化大革命をどう考えるかということです。陳凱歌監督の『さらば、わが愛/霸王別姫』、張藝謀監督の『活着』を観れば、文化大革命の問題点が明確に描かれています。その他、謝晋(シェ・チン)監督の『芙蓉鎮』や田壮壮監督の『青い嵐』。こういう作品を代表として、文化大革命の問題点が見事に描かれています。これについては今日私が、それが正しいとか間違っているとかと言うつもりは全くありません。ただ、そういう激動の時代だからこそ、その中で人間の生き方がクローズアップされ、切実性を増します。そのことが、私が最初にお話した映画はなぜ面白いかということに関係します。つまり、人間の本性に迫る、人生の縮図である、知らないことを体験できるということです。今日私の話を聴いている皆さんは、もちろん文化大革命を体験したことはありません。しかしお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんから聞いた話はいろいろあるはずですよ。そして自分が体験していなくても、映画の中から学ぶことがいっぱいあるはずですよ。そういう意味で、是非こういうテーマについても突っ込んだ勉強をしてもらいたいと思います。第5世代監督についてお話しをすればもっとたくさんありますが、時間がないので次に第6世代監督の話に移ります。

#### <第6世代監督の果たしている役割>

レジュメ3頁の第6が「第6世代監督の果たしている役割」です。その代表的な監督として賈樟柯(ジャ・ジャンクー)監督、張楊(チャン・ヤン)監督、そして張元(チャン・ユアン)監督などを取り上げたいと思います。ちなみに、日本では朝日新聞が2006年6月14~16日まで3日間にわたって「中国電影100年」という大きな特集を載せました。こんな大きな記事です。「文革の影 銀幕にも」という小見出しで、その2日目が第5世代監督の解説です。1日目が第6世代を特集し、張楊監督の『胡同のひまわり』を大きく取り上げています。この新聞記事は資料として差しあげますので、皆さん是非勉強してください。その他、今日この講義でお話できたことをきっかけとして、是非私のホームページを見ていただくとともにメールのやりとりで皆さんとの交流をこれからも続けたいと思います。意見があれば是非そこで言ってもらいたいし、こういう資料がほしいと思えば送りますので是非言ってください。

話を戻します。第6世代監督について私が考える第1のテーマは、今挙げたような第6世代監督たちは、なぜこのように自由に活動できているのだろうかということです。もっとも、彼らは自由に活動できているとは思っていないはずで、中国国内ではいろんな制約があるため、自分の作品を発表するについてそれなりの悩みをもっていると思います。そういう微妙な問題を今日私が語るつもりはありませんが、それは中国特有の問題だということによってそれなりに勉強してもらいたいと思います。多分皆さんのすぐ上の目標になる存在として第6世代の監督たちが存在していると思います。第1のテーマについて私が思うのは、彼らは第5世代監督の世界的な名声、世界的な活動を前提として、ある程度自由な活動ができているのだと思います。そういう意味で彼らは、第5世代監督の偉大な功績の上に第6世代の今の実績が積み上げられているということを感じざるべきです。

#### <第6世代監督と下放政策>

第6世代監督に関する坂和的問題提起として次に下放政策を考えたいと思います。この論点については、戴思杰(ダイ・シージェ)監督の『小さな中国のお針子』が大切な素材です。皆さん観てますか?これは監督自身の経験を踏まえた作品で、鳳凰山という田舎に下放された2人の青年が、地元の娘と恋に落ちるという物語です。文化大革命と下放政策は密接に結びついたもので、問題点は非常に大きいものがあります。そして、これについてはそれぞれの監督が自分の体験にもとづいているような描き方をしています。第6世代監督がすばらしいと思うのは、その見方の幅が広がっていることです。それだけ第6世代の若い監督たちの感性が鋭くなっているのだと思います。下放政策の是非についてもここで論じるつもりはありません。ただ、映画を作るについて、文化大革命の論点でもお話ししたように、厳しい時代、厳しい状況の中でこそ人間の生き方が問われるし、映画はそういう厳しい素材を扱うのに適した、すばらしい芸術だと思います。

#### <賈樟柯監督をどう評価?>

第6世代監督に関する次の問題提起としてお話ししたいのが、賈樟柯監督をどう評価するかということです。彼は世界的に高い評価を受け、世界の映画祭でいろいろな賞を受けています。日本では最近、『長江哀歌(エレジー)』が公開されました。当然皆さん観ていますね?観ている人は?半分くらい?意外に少ないですね。三峡ダム建設については、私は都市問題の観点からも言いたいことがいろいろありますが、この映画はその三峡ダム建設についての賛成、反対を論じた映画ではありません。ただ、三峡ダムの建設によって昔の村が次々と失われていく。そのことによってそれまでの人間の営みがなくなる。そういう悲哀を2組の夫婦を主人公として描いていますが、この映画の評価がなぜ高いのか、皆さんはどう思いますか。もしよろしければ、この映画はすばらしいと言う人と、この映画はつまらないと言う人に1人ずつ意見を言ってもらえたらうれしいのですが。

女子学生:すばらしい。監督と話したことがあって・・・。

坂和:逆にダメだと言う人はいませんか。まあ、言いにくいと思いますが。

男子学生:面白くない。観ている人に気持ちが伝わらない。この映画の物語はわかりにくいところがあり、現実と離れている。一番重要なのは観ている人の考えですから。

坂和:謝謝。今2人にお話してもらいましたが、当然このように人によって見方や評価が違います。そこで今のテーマは、賈樟柯監督をどう評価するかということです。日本の名監督と言われる人には、たとえば黒澤明監督がいます。最近では世界のキタノと呼ばれている北野武監督がいます。北野武監督は大監督ですばらしいと思う人はいらっしゃいますか。(多数が挙手)。わあ、すごいな。ああそうですか。それでは逆につまらないと思う人。ごくわずかですね。ちなみに私はその少数派です。

それからもう1人、今年のカンヌ国際映画祭で河瀬直美という女性の監督が最高賞のパルムドールに次ぐグランプリ(審査員特別大賞)を受賞しました。ご存知でしょうか?日本の奈良の出身の人です。知っている人は?全然いない・・・。カンヌ映画祭の受賞監督くらいはちゃんと勉強してもらいたいと思います。すると『殞(もがり)の森』というタイトルもわからないですね。作品の紹介はしませんが、今私が言いたいことは、賈樟柯監督の評価、北野武監督の評価、河瀬直美監督の評価、それは人によって違いますから、必ずしも賞を受けた監督が絶対にすばらしいとは言えないということです。しかし、ややもすれば、そういう評価を受けた監督はすばらしい、そこで落ちた監督はダメだ、そういう傾向が強いわけです。

特に、最初にお話した映画評論家として食っていかなければならない人たちは、賞を受けた作品はすばらしいという評論を新聞に書きます。悪口はまず書きません。そういう意味で、どの作品が、どの監督がすばらしい、あるいはダメだということについては、周りの評価に影響されないで自分の目をしっかり持つ必要があると思います。ちなみに、皆さんは韓国のキム・ギドク監督はご存知でしょうか？

学生一斉に：キム・ギドク。よく知っている。

坂和：彼が今までに監督としてつくった作品は、『春夏秋冬そして春』『サマリア』『弓』そして最新の『絶対の愛』を含めて合計13作あります。私は初期の『魚と寝る女』など5本は観ていませんが、その後のものはほとんど観ています。そして『シネマルーム』の中で「天才キム・ギドク！」と書いて毎回絶賛しています。ところが、彼の作品は韓国国内でも日本や中国と同じように上映する劇場が少ないようです。逆に言えば、韓国でも興行収入があがる、儲けられる映画をたくさんスクリーンで上映するというスタイルになっています。キム・ギドク監督はなぜか韓国国内では評価が低いようですが、世界的にはすばらしい監督と評価されているし、私もすばらしいと思っています。皆さんにはいろんな視点で監督論を戦わせてもらいたいと思います。第6世代監督についての問題提起をまとめると、第1になぜ自由に活動できるのか、第2に下放政策そして第3に監督の評価をどうするかというテーマをお話しました。

<一昨日は胡同巡りを・・・>

そこで次に、私の最も専門分野である都市問題、住宅問題に絡んだ『胡同のひまわり』のお話をします。先ほどお話しした「中国電影100年」で最初にこの映画が大きく取り上げられていたのでビックリしました。実は私は一昨日、タププリと胡同見学をしてきました。その1つは天安門の南にある前門や和平門から南にある琉璃廠(リュウリーチャン)文化街。もう1つは鼓楼、鍾樓周辺。前海、後海、西海のある什刹海(シーシャーハイ)公園とその周辺の胡同と四合院を人力車に乗って合計3時間たっぷり見学しました。そこで思ったことは、琉璃廠の方は再開発が急ピッチで進み、あと1、2年で胡同はほとんどなくなるだろうということです。それと逆に、什刹海周辺の胡同と四合院はまだ保存されているという感じがしました。

<弁護士坂和章平の都市問題の視点>

都市問題、住宅問題は長期的なテーマです。北京オリンピックを控えて今北京では開発、再開発が進んでいます。これは、もうひとつの重要な坂和的問題提起のテーマである、土地バブル、土地の値上がりというテーマとも関連します。私は都市問題に関する本をたくさん出版し、学生たちに対する都市問題の講義もたくさんやりました。また、大阪市内の阿倍野という大きな再開発に関する歴史に残る裁判をやりました。さらに、2000年から今年まで、岡山県の津山という地方都市で大きな再開発の事件を処理しました。これは、私の自慢話をしているのではなく、約25年間都市問題や住宅問題そして土地問題を勉強してきた中で、日本が歩んできたのと同じような問題点が北京でも今生まれているのではないかということを知りたいわけですが、私が思うに、都市開発のテーマとは一方で開発、他方で保全、この両者の調和をどこではかるのかということです。ところが日本では、開発と保全の調和といっても、調和という言葉が入っている以上、開発の方の力が強くなってしまいうという経験をしました。そこで日本では、1970年に「公害国会」と名づけられる国会が開かれ、「開発と保全との調和」というそれまであった条項が削除されました。つまり、1970年を転換点として、日本は乱開発の防止、環境の保全という方向に大きく舵を切り替えたわけですが、そういう意味では、日本の都市問題の経験を中国が、北京がいかに学ぶかということが大切だと思っています。もちろん政治体制の違いや人口の違いが大きくあります。ちなみに私は、ここ数年間の中国での土地の価格の値上がり、そして株価の値上がりについてかなり危機感を抱いています。日本でもそういう時期があり、「土地バブルの崩壊」という貴重な経験をしました。最初に話したように、中国では2007年10月1日から物権法が施行されました。これもひとつの契機として乱開発が進み、それに伴う土地収用=強制立退きという問題が起こっています。私は日本の土地問題、都市問題の第一線で頑張ってきた弁護士として、中国の胡同の取り壊しと、その跡地におけるマンションの建設の実態、そしてまた、それがどのような法制度と手続で実施されているのかについて大きな興味をもっています。

<『胡同のひまわり』と都市問題>

そういう観点から、張楊監督の『胡同のひまわり』を観てビックリしました。これを観た人は何人くらいいますか。少ないですね、うーん。この映画には、張楊監督自身の体験談が入っています。父親も息子も画家です。父親は文化大革命の時代に農村に追われ、画家になる道を諦めました。息子は父親と同じ道を歩むことをいったんは拒否しましたが、結局は自分も画家になりました。そういう父親と息子を主人公として、失われていく胡同の景色を描いたものです。当然張楊監督は、胡同を取り壊して開発していくことに批判的な目をもっています。日本にも京都、奈良という歴史的な都市があります。他方、東京は京都や奈良とは全然違う大都会として、大きいビルがたくさんあります。もちろん中国でも、上海、北京、大連その他巨大な高層ビルが林立する大都市と農村部とは大きく違います。そして今、北京という都市をどう改造していくのかについて、まさに開発か保全かという大きなテーマが問われているわけです。それに

についてはもちろん、政治や経済、法律そして行政が絡みます。したがって、当然いろいろと難しく複雑な問題があります。それを前提として、皆さんが映画づくりを学ぶについて、映画人になるについて、そのテクニックだけを学ぶのではなく、そういう社会問題も一緒に学んでほしいと思います。ところで、日本では弁護士や裁判官、検事になる人の数が、私たちの時代は1年間で約500名でした。今それが2000名近くに増えていきます。数年後には3000名になります。このように法曹人口が毎年500名の時代から3000名の時代に大きく変わり、今や弁護士が仕事にありつけないという時代に入ろうとしています。ちなみに、中国では司法試験(律師試験)の合格者が年間約3万人だから日本の10倍です。ここで私が何を言いたいかというと、映画の仕事をする人は映画のテクニックだけではなく感性が大切。そして弁護士になる人も、法律の知識だけではなく感性が大切だということです。そういうことを今、日本の若い弁護士たちに教えなければ、法律の知識は多少使えるけれども人の心がわからない、そういう人たちが増える危険があります。そのため私は弁護士になろうとする人に対しても、「この映画を観ろ、あの映画を観ろ」とさかんに言っています。それは、人間の心がわからない弁護士は社会の中で何の役にも立たないと思っているからです。

#### <『シヨンヤンの酒家』と『上海家族』>

話がとびましたが、『胡同のひまわり』は、張楊監督の映画人としての感性を見事に表現した映画だと思えます。同じような都市問題を扱った作品が、霍建起監督の『シヨンヤンの酒家』です。さらに、上海の住宅事情を描いた彭小蓮監督の『上海家族』もあります。『シヨンヤンの酒家』を観た人は?わりと観てないですね。それから『上海家族』は?え、誰もいない?これはこういう映画です、という説明はしません。ただ、『シヨンヤンの酒家』は重慶という中国最大の都市の都市問題をテーマにしています。旧市街地にある吉慶街で「鴨の首」という人気メニューを出している屋台の女主人が主人公で、この屋台の立ち退きが1つのテーマです。『上海家族』は3世代(おばあちゃんと母親と娘)を住宅問題を通して描いています。上海は非常に住宅事情が悪い。住むのに家賃が高い。それを表わす1つの象徴的なお話として、水道代が高くなった、それはなぜか?それは毎日風呂に入るようになったからだという話が出てきます。それまでは1週間に1回しか風呂に入らなかったのに、毎日風呂に入るようになったから、水道代がバカ高くなったということです。

そういう都市問題、住宅問題に対して私の弁護士としての目で切り込み、その問題点を指摘していくことは、非常に大きな意味があると思っています。これらの評論は『坂和的中国電影大観』にたくさん書いていますので、是非それを読んでください。以上、第6世代監督に関連して、「下放政策」と「映画賞の意味合い」と「都市問題」などの問題提起を話しました。ここでもう4時になってしまいましたが、4時に終わらないとダメですか?少しはOK?それでは15分ほど授業を延長することにします。

#### <ドキュメンタリー映画をどう考える?>

少し時間を延長して、もうひとつ「ドキュメンタリー映画をどう考える?」という問題提起をしたいと思えます。日本では今年の夏、『ヒロシマナガサキ』という原爆をテーマとした映画と沖縄戦の悲劇を描いた『ひめゆり』という映画がヒットしました。これは、戦争終了後60数年を経た中で、原爆の体験や沖縄戦の体験をした人がだんだんと死んでいき、それを語る人が少なくなっていることの裏返しです。ちなみに、中国でもやはり日中戦争時代の問題点を再検討しようという意味で、70周年を迎えて「南京事件」をテーマとした映画がつけられました。それが『南京』(『南京浩劫(災禍)』)というアメリカ製作のドキュメンタリー映画と中国の第6世代陸川(ルー・チューアン)監督の『南京!南京!』です。「南京事件」の評価については大きな対立がありますが、それを映画という芸術を通して議論することはいいことだと私は思っています。そこで、中国のドキュメンタリー映画の話です。ひとつすばらしいと思ったのは『鉄西区』という合計9時間の大作です。これは瀋陽にある国営の鉄工場が衰退し、崩壊していく姿を描いたドキュメントです。『鉄西区』を観た人は?うーん1人だけ。ああ、瀋陽の出身ですか。是非、また皆さんに紹介してください。

瀋陽出身の学生:監督は同じ学部を卒業した先輩です。

坂和:でも、1人しか観てないというのはちょっと……。もう1本は『ココシリ』というチベットカモシカの保護を描いた映画です。これも『南京!南京!』と同じ陸川監督作品。これはたくさんの方が観ていますね。美術のテクニク的なことはよくわかりませんが、とくに美術学部の学生はこういう映画を勉強する必要があると思います。私が感動したのは、チベットカモシカを守るために命を懸けて頑張っている民間パトロール隊の人たちの姿です。皆さん、よく考えてみてください。この映画によってチベットカモシカの絶滅を防ぐことができたのです。そう考えると、映画とはすばらしい芸術だと思います。アメリカのゴア前副大統領が『不都合な真実』という映画でアピールした全地球的な環境問題への警告も大きな意義がありますが、『ココシリ』が中国の環境問題にアピールした功績もすごく大きいものがあります。是非こういうドキュメンタリーも観て、これから皆さんがつくる作品は全世界に発信されて、地球の環境問題に寄与するんだということを自覚してもらいたいと思います。

#### <最後のまとめを3分で……。>

あと3分だけ最後のまとめをやります。レジュメ第7に、「なぜ、中国映画が好きか？（坂和的興味の視点）」を書いています。これは非常に単純なお話で、歴史が大好き、きれいな女優さんが大好き、旅行が大好き、活劇モノつまり中国の武侠映画が大好き、このように単純に映画を楽しみたいという視点を基礎として私の映画評論が成り立っています。また、レジュメ第8は、「中国映画のジャンル分け」をしています。これはまさに坂和流、つまり私流の好き勝手なジャンル分けです。2004年12月に完成した『シネマルーム5』までに観て書いた中国映画が計66本でした。その後、今年9月25日に観た『吳清源 極みの棋譜』まででまた約60本になりました。したがって、『坂和的中国電影大観』のパート2を近いうちに出版したいと思っています。さらに、『シネマルーム』については、現在パート15を製作中です。私は今、月に25本ないし30本の映画を観ています。約400頁の本の厚さで私の映画評論が60から70本入ります。ということは、3カ月に1冊本を出版しなければならないということです。私はこれからも死ぬまでこんな風に好きなことを自由にやりたいと思っています。それから、私の夢が2つあります。ひとつは、『映画と法律』というシリーズの本を出版することです。そしてもうひとつは、中国映画についての私の評論を中国語に翻訳した本が中国の書店に並ぶことです。今日の出会いをきっかけとして、是非皆さんが私の書いている中国映画に関する映画評論に興味をもっていただくことを期待しています。皆さん、今日は私の話を聴いていただきありがとうございました。また先生方にはこんなチャンスを与えていただいたことを感謝します。

学生：(大きな拍手)

坂和：謝謝。再見(ツアイチェン)。

学生：(拍手)

< 講義後の雑談 >

女子学生：先生が書いた本で中国語の本はありますか。

坂和：ない。

女子学生：先生の本を買いたいのですが。

坂和：全部置いていくから、あげる。重たいから1冊ずつしかもってきてないから。とりあえずあげる。

女子学生：わあ。中国のアニメを観たことがありますか。

坂和：まだ観たことない。昨日アニメをつくっているところを教えてもらった。

女子学生：日本のアニメ観ますか。

坂和：観る。日本の方が数倍先に進んでいて、中国は今始めたばかり。

女子学生：アニメの勉強しているのですが。

坂和：どっちかというと、私はアニメはあまり好きではなくて実写の方が好き。ただ、色使いとかテーマ性とかですばらしいものがこれから増えてくることは間違いない。ただ、アニメもアメリカのものとフランスのものとは、新しいのが出てるから日本だけではなくてもっといろいろ勉強して。

女子学生：謝謝。ありがとうございました。

坂和：再見。